住まいの福祉機器ガイドブック

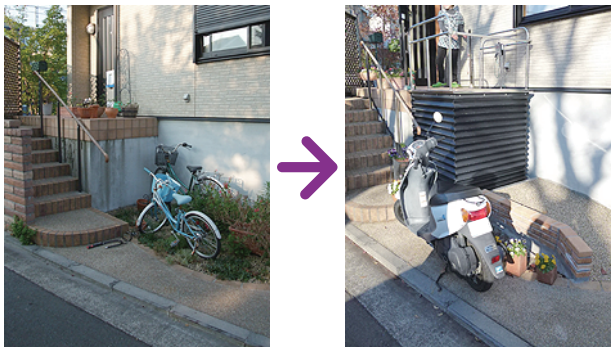
肢体不自由 編

自分でできることを増やすことや親の介助負担の軽減を図ることは、将来にわたってとても大切なことです。福祉機器は取り扱いが難しいと感じるかもしれませんが、設置方法や使い方を正しく理解することによって非常に役立つものになります。リハビリテーション専門職のアドバイスを受けながらすすめていきましょう。

段差解消機

外出しやすい環境を整えることはとても大切です。道路から玄関まで高低差があり、敷地が狭い場合は、スロープをつくると角度がとても急になってしまい、使いにくくなることがあります。そんな時は、段差解消機が役に立ちます。機械を使ってエレベーターのように車椅子を上下に移動することができるので、スロープよりも小スペースで設置ができます。段差解消機の種類はメーカーによって様々ありますので、動線や設置スペース、費用面等を考慮しながら選択するとよいでしょう。

改造前は、玄関の上がり框の段差が約 20cm あり、さらに道路の縁石の段差も 10cm あったため、車椅子での移動がとても不便でした。そのため、縁石を切り下げて道路との段差を約 2cm に変更し、玄関の扉も三枚引き戸に入れ替えて間口を拡大しました。そして土間には段差解消機を入れたので、車椅子を持ち上げる介助はほとんどなくなり便利になりました。

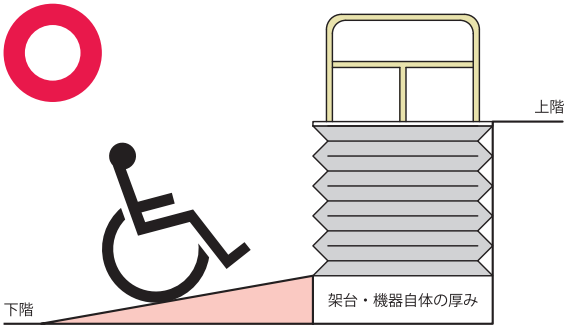


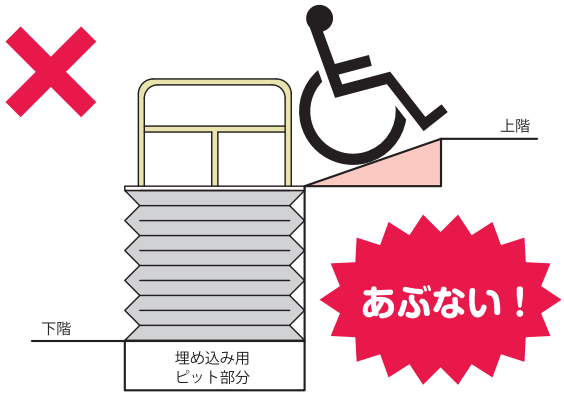
段差解消機は後からでも設置は可能です。子どもがまだ小さいうちはサッと抱えて階段を登ることもできます。
しかし、成長に伴って抱っこが大変になってくると階段昇降はとてもキケンです。段差解消機をすぐに設置しなくても、あらかじめ駐輪場や植栽などでスペースをつくっておけば、後から比較的容易に段差解消機の設置ができます。

ポイント　段差解消機の上階にはスロープをつけないで！

段差解消機は高く上昇するものほど価格が高価になります。段差解消機から乗り降りする時は、上下階ともに段差がない設置が理想的です。しかし、金銭面等から、一定の高さまで段差解消機で上昇し、残りの段差はスロープを使って解消する手法をよくとります。

その時に必ずスロープは下階側でとるようにしましょう。上階でスロープをつくると、転落等のリスクがとても高まります。
上階で段差解消機から降りる時は、必ず平坦な場所に降りるようにしましょう。





スロープをつくる場合は下階側につくろう！

いす式階段昇降機

子どもを抱っこして階段を昇降するのはとても大変でキケンです。２階にしかトイレやお風呂がない場合や、２世帯住宅で２階が生活の中心となっている場合には、いす式階段昇降機を利用すると介助負担が大きく軽減されます。
いす式階段昇降機はもともと大人を対象としている福祉機器ですので、クッションなどを置いて、子どもが使いやすいように工夫しましょう。
※３階建ての住宅やコンクリート構造等の住宅は、後から設置する場合でも建築確認申請が必要になります。詳しくはメーカー等に確認してください。

昇降機の椅子部分にクッションチェアを置いて、しっかり座れるように工夫しました。また、昇降機への乗り降りがしやすいように広い場所までレールを延ばしました。

上階では、昇降機へ乗せる時に下が見えて怖いと感じる人もいます。レールを延ばすと費用はかかりますが、安全な場所までレールを延ばして乗り降りできるとよいでしょう。

ポイント

階段昇降機への乗り降りは、広くて安全な場所で！

ホームエレベーター

新築や家の建て替え、大規模に改造をする場合、１階から２階への移動を容易にするホームエレベーター(EV)はとても便利です。EV は大きく分けて「２人乗り」と「３人乗り」があります。車椅子やキャスターの付いた座位保持装置等を室内で使う場合には、広さに余裕のある「３人乗り」の EV を選択しましょう。メーカーによって大きさも異なりますので、ショウルームでの試乗をオススメします。新築時は将来に備えて EV の設置スペースを考えておくことも有効です。

「３人乗り」の EV に親子２人で乗り込んだ写真です。将来、車椅子が大きくなってもなんとか２人で乗ることができますが、車椅子を作り変える時は、注意しましょう。

玄関の土間部分に EV を設置して、上がり框分の段差を解消できるものもあります。EV の扉が内部の前後に付いた通り抜けタイプもあります。生活しやすい動線を検討しましょう。

ポイント

「３人乗り EV」がオススメ！

リフト

抱っこ介助が大変になってきたら、介助をしてくれる人を増やしたり、リフト等の福祉機器を使うことをオススメします。リフトを使うとお母さんひとりで好きな時間帯に子どもの介助ができます。また、入浴時には洋服を着たまま介助ができますので、より安全になります。さらに、お母さんの両手があくため、子どもとの会話や入浴中のマッサージなどのコミュニケーションも増えると言われています。リフトは浴室以外にも寝室や玄関、トイレ等でも利用することができます。

ポイント① リフトの支柱はなくそう！壁や天井にしっかり補強しよう！

固定式（支柱式）

ユニットバスの壁面に補強を入れることによって、固定式リフトの支柱を立てずに設置ができます。支柱に、子どもの頭や足をぶつける心配がありません。

天井走行式（x-yレール）

X-Y レールシステムの天井走行式リフトは昇降範囲が広いのでとても使いやすいです。天井からリフトのレールを吊っているので、支柱はありません。掃除もラクです。

天井走行式（1本レール）

天井走行式リフトのレールを天井に埋め込んで設置していますので、見た目がスッキリします。ただし、ユニットバスではレールを埋め込むことはできません。

ポイント② 脱衣室と浴室の間の移動（室間移動）をちゃんと考えよう！

シャワー用車いすで移動

ユニットバスの出入り口の段差をなくすと、シャワー用車椅子で寝室から洗い場まで一気に移動できます。そして、洗い場から浴槽の間はリフトを使います。

リフトの架け替えで移動

脱衣室と浴室の天井にレールがあれば、１台のリフトで移動ができるものがあります。浴室入り口に段差があっても大丈夫。浴室の扉を特注せずに設置可能。

リフトのまま移動

各部屋の天井面にリフトのレールを埋め込んでいるので、シャワー用車いすへの乗り換えや架け替えの手間がなく、スムーズに寝室から浴槽まで移動できます。

企画・協力：横浜市総合リハビリテーションセンター研究開発課
担当：西村　顕（一級建築士・工学博士）
このパンフレットで使用している写真の無断転載・無断複製はご遠慮ください。イラスト／うつみちはる　発行／一般財団法人 保健福祉広報協会　2015 年 10 月